

【「熊本の心」推進協議会賞】

ささえ合う人になるには

錦町立一武小学校 4年 那須 心琴

「何年生ね？」「どこの小学校ね？」

ひいばあちゃんに会うたびに、同じことを何回も聞かれます。さいしょは、「また？」と思って、ちょっとめんどうに感じていました。でも父と母は、何回聞かれてもにこにこしながら答えていました。ときどき、わざとおもしろく言って楽しそうでした。わたしはふしぎに思って父にたずねました。

「ひいばあちゃんはにん知しようっていう病気なんだよ。治らないけど、まわりがやさしくすると、進み方がゆっくりになることもあるんだって。」そう言ったあと、父は続けました。

「人の気持ちを受けとめる、やわらかい心が大事たい。」この言葉が、わたしの心に残りました。

ひいばあちゃんは、わたしが一年生のころまでだがし屋さんをしていました。子どもから高校生まで、毎日にぎやかでした。でも、中にはいたずらをする子もいました。おかしをこっそりぬすんだり、物をかくしたり。けいさつに言えば簡単だったのに、ひいばあちゃんはちがいました。「心のきれいな人になってください。おばちゃんのねがいです。」という紙をはって、いたずらした子にちゃんと話しかけていたそうです。

「すぐにおこるんじゃなくて、話して分かってもらいたいとよ。」と笑っていた顔を、わたしは今でもおぼえています。

父の話を聞いた後、わたしは、同じことを聞かれてもやさしく答えるようにしました。小さいころにだっこしてくれたことや、おやつをくれたことを思い出しながら話をすると、「そうね。がんばってね。」と笑ってくれました。その日は、いつもよりもっとすてきな笑顔でした。

人は一人では生きていけないと思います。わたしも、つらいときにやさしくされてうれしかったことがあります。だから今はわたしもまわりの人にやさしくしたいです。

さい近、祖父の耳が聞こえにくくなって、ほちょう器をつけました。でも、それで何でも聞こえるわけではありません。祖母が、前に立ってゆっくり話しているのを見て、わたしもまねしています。

「その人が笑顔になるなら、ちょっとがんばるのはいいこと。」そう思えるようになった自分のことが、少しだけ好きになりました。

でもときどきやさしい心をわすれてしまうこともあります。いらいらしたり、わがままになったりすることもあります。そんなときは、ひいばあちゃんの言葉や、祖父の笑顔を思い出したいです。そしてこれからもおたがいに思いやって、ささえ合える人になっていきたいです。